

JAMS 発足の動機

クリスマスの日、ペシャワールで一番上等のケーキをヤケになって大量に買い込み、入院患者全員に配った。山の中から出て来た患者には恐らく最初で最後の豪華な食べ物であつたらう。あるスタッフが言った。

「ドクター、奴らにはこの味は分かりませんぜ。この小さいケーキ一個二十ルピーで一週間分のめしが食えると聞きやあ、口が痺れますよ。もつたいねえ。」

「かまわん。ミルクをたっぷり入れた上等のお茶と一緒に五十名全員に配れ。これくらいの贅沢は、たまにはさせろ。俺の道楽だ。」

底冷えのする病棟にはストーブもなかったので、ガス・ストーブを全室に備えさせた。冷たい病棟には暖かい火が燃え、患者たちは見たこともない高級の洋菓子と熱い茶をすすりながら談笑した。久しぶりに笑顔が病棟にあふれていた。連日の過剰な労働で疲れていたスタッフたちも、それにつりこまれて幸せそうだった。



今は元気になったハリマ (右)。ミッション病院にて

例のハリマも同室の女性患者と共に笑顔で向かい合っていた。変形した手で器用に気管切開の部位を押さえ、かすれた声をふりしぼって談笑し、ケーキをばくついているのを見て私はほっとした。鉛色の空と冷たい雨にこだまする砲声の下、迫害と戦乱に疲れた者にとっては、たとい一瞬でも暗さを忘れる暖かさが必要だったのである。それが私の感傷から出たものであると口の中でとろけるケーキの一片と共に命あることの楽しさを思い起こせば、それでよかった。彼ら患者たちとハリマの笑顔こそが何よりも代えがたい贈り物であった。

その後、このハリマのような例に対する対策が痛感され、JAMS 発足の動機ともなった。実に一人の女の率直な叫びが、次々と良心の連鎖反応を呼び起こし、アフガニスタンへの抜本的ならい対策発足を実現させる強い推進力となったのである。この事実は、本人を含めて誰も知る由がなかった。

変貌したのは、ハリマというらしい患者のみではなかった。我々もまた彼女によって新しい目を養い、力を得たからである。

